

学生の表現活動

The Expressive Activities of Students

狩野 浩二*

KARINO Kouji

キーワード：表現活動、教授学、教師教育、島小、斎藤喜博

目次

1. 大学における教師教育
 - 1) いきいきとした学生たち
 - 2) 総合演習
 - 3) 心をひらくという課題
2. 表現活動を創る
 - 1) 総合演習の開始
 - 2) 詩グループの苦悩
 - 3) オペレッタグループの展開
 - 4) 表現活動を終えて
3. いきいきとした学生を育てるために

1. 大学における教師教育

1) いきいきとした学生たち

2003年7月下旬の金曜日、学生たちが集まってきた。この日は、前期の講義がすべて終わり、補講期間の最終日で、これから始まる試験に備えて学生たちにとっては多忙な時期であったが、講義の最終日に相談した結果、この日がゼミの反省会日として学生たちによって選ばれた。

この会の間、学生たちは、実にすっきりとした明るい表情で参加していた。誰かから強制されたり命令されたりして動くのではなく、自分たちで始めから終わりまでを取り仕切った。会の進行途中で行なったゲームの中では、自己紹介をするという場面があった。参加者は、お互いに指名しあいながら自己のことを語った。実に晴れ晴れとして、気持のよい反省会であった。

この学生たちは、4月当初まったく正反対の状況であった。出る釘は打たれるというような感じであり、それぞれが遠慮し、目立つことをするの

を極端にいやがった。後述のように、どんな勉強をやらされるのかというような感じであり、学生全体に受動的な雰囲気があった。

本稿では、2003年4月から7月にかけて行なったゼミナールのなかで、学生が表現活動を通して、どのような変容を遂げていったのかということに光を当てる。その作業を通して、大学での教師教育の改善についてのひとつの考え方を析出したいと考えている。

2) 総合演習

大学の教職課程に“総合演習”という新しい科目が加わった。教育職員免許法の改定により、新しく加わった科目である。教職必修科目であり、学生にはこの科目の履修が義務づけられている。学校教員養成課程・教育学専修の学生は、2003（平成15）年度から、2年前期にこの科目を履修するように変更した。それまでは、3年前期に履修していたが、1年で行なう基礎演習と、3年での研究室所属（卒業論文ゼミのクラス）決定の間に時間的な空白があった。筆者は、今年度この科目の担当となり、4月から7月までの前期期間に、教育学専修の学生たちと一緒に勉強することになった。

総合演習は、総合的な学習の時間が、初等、中等教育の学校で取り込まれるようになり、それに対応して新設された。総合的な学習の時間の取り組みについては、今後じっくりその推移を見てから論じる必要があるが、これまで筆者が見た限りでいえば、この時間の取り組みには認識活動重視型の授業が圧倒的に多い。学校の教育課程における教科目の種類でいえば、理科や社会などのいわゆる内容系の教科領域を科学的に取り扱ったのが

* 学校教育（教育学）

多い。

その一方で国語や音楽、体育などの表現について取り組んだものは稀である。中等教育では、ともかくとして、初等教育において表現に関する教育実践が深まらないということには、先行研究が指摘しているように、芸術に関する教育実践が上級学校への進学にあたって切り捨てられているということや教師教育のカリキュラムのなかで表現が重視されてこなかったという事情がある*¹。

将来、教師をめざす学生たちは、この科目をどのように受け止めるだろうか。彼らが教師となったときにどのように仕事を追究していくのだろうか。そのようなことを考えながら、今年度のゼミ運営を構想してみた。そこで、大学における学生たちの学習状況を検討し、課題を析出した。

課題をあえてひとつだけあげるとすれば、学生たちの心が閉ざされたままであるということである。心をひらいて何かに挑戦してみる、謙虚に勉強するという雰囲気や学生たち全体に不足しているように筆者は感じている。

3) 心をひらくという課題

一昨年から、いくつかの小学校で共同研究する機会を得た。それらの学校で経験するのは、児童や生徒の心をひらくということの難しさである。

ある小学校3年生のクラスを訪ねたときのことである。その学級で一時間限りの授業をしてみることになった。筆者が選んだ詩を教室に持ち込み、それを児童といっしょに読んでみた。この時は、高村光太郎の「クロツグミ」という詩を選んだ。授業では、クロツグミの鳴き声とそれを聞いている人間の声とを峻別するという作業を児童といっしょにしてみるつもりでいたが、実際には、児童の発言がきっかけとなり、クロツグミとその鳴き声を聞いている人間との位置関係を考えるというような展開になった。そして、この授業では、冒頭から立ち往生するという経験をした。

最初に詩のプリントを児童に配布し、そのあとで、めいめいで声に出して読むようにうながしたが、どういうわけか教室の児童たちは皆口をつぐんだまま読もうとしない。それがふざけているとか、授業者をからかっているとか、そういう雰囲気

気ではない。どの子も一所懸命に勉強しようとしていることがその表情から分かった。読んでみてください、とうながしてもどうしても声がでてこない。しかたなく、教室の児童をいくつかにわけて読んでみるようにしてみたが、それでもまだ声がでてこない。そこで全員で声を揃えて読むというような方法をとった。これでようやく何人かの児童の口が動き始めた。そういうことがあって、そのあとの読みとりをすすめ、授業は終了した。

授業のあとで聞いてみて分かったのであるが、この子たちにはふたつの疑問があったという。ひとつは、いつになったら授業が開始されるのかということであった。受持の教師が教室で授業の開始を告げると、当番の子どもが号令をかけ一斉に授業開始の挨拶を全員で声を揃えてすることに、この学級ではなっていた。それが、この時は「こんにちわ」と声をかけ、簡単な自己紹介をし、授業を開始した。そのために挨拶のきっかけを学級全員に伝える役目を負っていた二人の当番児童は、級友たちに声をいつかけたらいいかと、その授業中ずっと待っていた。その当番の子たちには実に申し訳ないことをしたとあとで反省したのであるが、さらに驚くのは、二人の当番児童がいつになったら挨拶のきっかけを作ってくれるのか、授業者はそれをいつ合図するだろうかと教室の全員が今か今かと待っていたらしい。したがって、印刷物を配って、それを声に出して読むように言われても、上の空であり、声がでなかったという。筆者は、このように真面目な児童たちの反応に、心から感動し、このように素直な子どもを心底いとおしく思った。

この子たちのもうひとつの疑問は、以下のものであった。通常この学級では、まとまりのある文章を声に出して読む際には、題名や作者名をまず読み、そのあとで本文を読み始めるというように約束されていた。当日の児童たちは、その約束事をしっかり守ろうとしたが、授業者は題名の「クロツグミ」、作者名「高村光太郎」を読み飛ばして、本文の最初「クロツグミなにしゃべる…」から声に出して読んでみるように要求したのである。これもあとで聞いてみて分かったのだが、題

名や作者の名前を読み飛ばすということがこの子たちにはどうにもできなかった。このことを聞いたときには、ほんとうにすまないことをしたと思った。子どもというのは、想像する以上のごとをよく記憶し、心に引っかかりがあれば、やはり身体自体が思うように動かなくなる。

こうしたことから分かることは、このようなわずか授業冒頭の小さなことひとつをとってしても、学習にはストップがかかるということであり、いったん気持ちがふさいでしまえば、学習への通路が閉ざされるということである。

このことは、学生たちにとっても同様である。真理探究の作業を進める中で学問に対して謙虚になり、ひたすらに勉強しようというようになるのは、なかなか難しいことであり、現実には、青年たちが心を閉ざしてしまうような要因は数多くあり、そうしたものから彼らを解き放つということがひとつの課題となる。心をひらくということが何より必要であるということである。

2. 表現活動を創る

1) 総合演習の開始

ゼミナールの受講者数は20名であり、小振りな教室で十分に間に合うということであったので、はじめは、そこで先行実践例を参考に身体表現活動の実際ということを取り上げた^{*2}。4月中は、リズム感にあふれた詩や具体的に情景を思い描きやすい詩などを読んでみることで、声に出すことの楽しさ、それを指導する際の勘所について受講生と一緒に考えてみた。4月11日、第1回のゼミで、講義全体の日程や概要を説明し、この時間には受講者全員で身体表現活動に取り組んでもらいたいということを簡単に話した。教室の雰囲気は、これからどんなことがはじまるのだろうかという期待より、不安の方が大きかったようである。学生たちの表情はどれも硬いものであり、心身共に緊張した状況であるということが伝わってきた。

ゼミをすすめるにあたって、これまでの実践記録などを紹介したり、映像などの記録によって児童や生徒が表現活動にとりくむ姿を見てもらうということも考えたが、そうすると固定観念を押し

つけることになり、学生たちを型にはめることになると考えてそれはやめることにした。学生たちにとっては、言葉で説明したほうが、さまざまに想像力を働かせることになり、結果として自分たちの表現活動へのイメージをそれぞれ自由に話し合うということにつながった。そのあとで、谷川俊太郎の『ことばあそびうた』から「かっぱ」を読んだ。この詩を教材として使った授業を何度かみたことがある^{*3}。詩のリズムを習うのに大変よい、力のある教材である。実際に、この詩を黒板に書き、学生たちと一緒に声に出して読んだ。当日参加していた学生は、後日書いたレポートの中で次のようにいう。

〈久しぶりに詩の朗読をしたり、歌を唄ったりした。最初の授業で「かっぱ」の詩をみんなで読んだとき、1回目はすごく恥ずかしかった。しかし、2回目、3回目と読んでいくうちに恥ずかしさは消えて、楽しくなってきた、テンポよく読むことができた… (略) …^{*4}〉

〈… (略) …いきなり『かっぱ』の詩を読んでみましょう。はい、さんはいっ。』といわれ、「ちょっと恥ずかしい」と思いつつ、読んだ。初めは声が出せない。中学・高校と学年が上がるにつれて、みんなと合わせて何かを読んだりするときの声はちいさくなっていった。みんなが声を出してくれなければ、自分の声が目立ってしまう…という不安があったからだ。／でも学科のみんなは、思ったより声も出してくれる。何度か読むうちにそのリズムにもものってきて楽しくなっていった… (略) …^{*5}〉

〈最初、「総合演習」の授業でどんな事をするんだろうと思っていました。いきなり「かっぱ」の詩をやったときは少しびっくりしたけれど、なんか小学生の時に戻ったみたいで楽しかったです。小学校低学年の頃は恥ずかしいというのはなかった気がするけど、やはり大学生ともなると、前に出て言ったりするのは恥ずかしかったです。もし自分が教師になったとき、低学年だったらどんどん前に出て言ったりしてくれるかもしれないけれど、高学年になると恥ずかしさが出てくる子どももいるということを頭に入れておかないとなと思いました… (略) …^{*6}〉

このように学生たちは、かなり恥ずかしいというような表情をし、実際にリズムも何もなしで、遠慮しがちにか細い声で読んでいた。そこで、こちらで拍をとりながらリズムカルに読んでみると楽しいということを示して、読んだ。その結果、まずは息の使い方を練習することと、学生たちの身体の固さをとることが必要だと感じた。そこで母音のアを意識して読んでもらい、深く息を吸い込む練習をしてみた。身体全体に息を入れ込む感じをまずは言葉のイメージとして持ってもらう。両肩に力が入ってしまい、思うように息が吸い込めない学生には、両手の掌を腰のあたりにあてさせ、そこに空気が入りこむような感じをイメージさせた。そして、身体の力を抜いてリラックスさせる野口体操^{*7}をやり、次第にやわらかい声が出るようになった。

第2回目は、前回経験してもらったリズムを生かした読み方について再び練習した後に、イメージをふくらませて、そのイメージを声で表現した。教材は、山村暮鳥の「雲」であり、この作品については、いくつかの小学校で川嶋環さんの授業をみたり^{*8}、自分でやってみたことがある^{*9}。その時の展開を参考にしてみた。この詩の中では、「おうい雲よ」と呼びかけるところがあり、これをどのような感じで呼びかけるのか、ということを具体的に考えた^{*10}。雲がどの辺にあって、どのような雲なのか、それに対して自分たちはどこから、どのように呼びかけるのかということをそれぞれ表現し、声による表現によって具体的に情景を表わすことができるということについて考えた。そのあとで草野心平の詩「おれも眠ろう」を取り上げ、さらにイメージをつくる作業を経験した^{*11}。この詩は、るるり、りりり、というオノマトペで全体が構成されており、解釈の手がかりは、「おれも眠ろう」というこの詩の題名と、本文の叙述形式が対になっているということだけであり、予想通り、相当困難な作業となった。この詩の教材化にあたっては、谷川俊太郎の「かつば」と同様に、何度かこの詩をとりあげた川嶋環さんの授業を参考にした。

第3回目は、表現グループづくりである。グループづくりにあたっては、20名で3グループと

し、それぞれ、“合唱”、“オペレッタ・総合表現”、“集団朗読(いわゆる群読)”の材料をこちらで用意しておいて、そのいずれかを学生たちが選択し、グループを形成した。グループ分けをしてみると、“合唱”グループの希望者はわずかで、予想に反して集団朗読の希望者が多い。そこで、“合唱”は、全員で取り組むことにし、ふたつのグループに分かれた。最終的には、“オペレッタ”グループが14名(うち男子が2名)、“集団朗読”が6名(うち男子が2名)という構成である。10名ずつの3グループとしたほうが、練習や発表の際にすすめやすかったが、しかし、その人数の多少に応じて表現の内容や方法を工夫するということは、やってみてよい。そして、それぞれのグループごとに取り上げる作品をどうするか話し合った。

あらかじめ印刷しておいたリストには、立教大学の学生が取り組んだ身体表現活動^{*12}の中で取り組み甲斐があったといわれているものを書き写しておき、その中の実際の作品を回覧しながら相談した。こうして選ばれたのが、オペレッタ「はだかの王さま」と、二つの詩、城侑「二人の山師」、草野心平「河童と蛙」である。合唱については、日本古謡の「うさぎ」を全員でやるのが後にきまり、さらには学生たちからの希望で「おおきな歌」を取り上げた。

2) 詩グループの苦悩

詩の朗読を希望した学生は6名で作品を解釈することからはじまった。最初は、原作品を参照しながら、表現の構想を練ったが、しかし、まったくのゼロの状態からはじめるわけであり、その道のはほんとうに困難なものだった。当初は、広い実習室を使って、学生たちがシナリオづくりに着手したが、じっくりと作品を読む必要があるということで別の小さな部屋にうつった。話し合いの最中には、かなり長い時間の沈黙がつづいて、考えあぐねているというようなことが多くあった。詩の朗読に取り組んだ学生は後に提出したゼミレポートの中で次のように書いている。

〈…(略)…私たちの詩の班は、はじめの内はなかなか進まなかった。人数が少ないこともあり、

お互いになかなか意見が出なかった。そこで試しに読んでみるが、ほんとうにひどいものだったと思う… (略) …^{*13)}

〈… (略) …最初、この二つの詩(「二人の山師」「河童と蛙」一筆者)に取り組むときは、何をどういう風に読むかとか、ここは人数をかえて読もうとかを決めるだけで時間がとられ、ただ棒読みで読んでいただけという状態でした。そして声も小さかったです。そこでこのままではだめだということで試行錯誤し、時に、読み方について先生からアドバイスを頂いて(たとえば「河童と蛙」で「ぐるりの山はぐるりの山は息のみ」というところの最初のぐるりの山は近くの山で、二つ目のぐるりの山は遠くにある山とし、遠くに呼びかける感じで読むなど)少しずつ改善されていきました… (略) …^{*14)}

〈… (略) …最初は意見やアイデアもほとんど出ず、みんなバラバラであった。そのころは、はっきり言って授業が苦痛であった。どうしているかわからず、先もまったく見えなかったのだ。しかし、回数を重ねていくうちに、不思議と雰囲気がかわっていくのを感じた。意見やアイデアも段々とでてくるようになっていった… (略) …^{*15)}

〈… (略) …オペレッタなんて恥ずかしくてできないと思って詩の群読を選んだが、それはそれで大変だった。詩を解釈することから始めたが、ほとんど意見がでなかった。私の解釈を述べるとみんな、そうかもねと言うので、押しつけのように感じることもあった… (略) …^{*16)}

いっそのこと、こちらからいくつかの実践例を紹介した方がよいかと思い、学生にもそのことを話してみたが、結局、それはやめることにした。かたちだけを表面的にまねるようなことになるだけであると考えたし、この人数であれば、苦勞してシナリオをつくるという過程を経験した方が最終的な達成感が大きなものになると考えたからである。

3) オペレッタグループの展開

オペレッタ・総合表現のグループは、先のリストから最終的に「はだかの王さま」を選んだ。こ

の作品は、教授学研究の会の教師たちが共同で作りあげたものである^{*17)}。詩の朗読とは異なり、とりあえずは、身体表現活動のための歌唱の部分や語りなどが作品としてできあがっている。それをどのように解釈し、表現するかを考えることから始まる。連休中の5月2日にそれぞれの役割について話し合いが行なわれた。学生のなかの何人かが中心になって自分たちで取り組み始めた。その様子を見てみると、どうやら学生たちは一般的な新劇のように一人一役で、自分の役目が終われば、舞台袖に引っ込んで裏方をすればよいと思っていたようである。しかし、この時間にとりくむ表現活動は、集団で行なうこと、全員が常に舞台の表に立って、すべての表現を身体だけで表現することなどの条件を出して、役割そのものをみなおした。

小道具などを一切排除するということには、かなり抵抗があり、6月に入ってから動作をつけるようになったときに、再びこちらから課題提起してみた。学生たちは、機織りによって眼に見えない不思議な布がつくられる状況を表現しようとして布地の実物をもってきたが、実際にやってみるとこれでは表現というより説明になってしまい、また、見えないはずの布が見えてしまうわけで、結局はそれをやめることにした。当時の状況を学生たちは、つぎのように述懐している。最後に提出してもらったゼミレポートの一部である。

〈『裸の王様』でいこう!!〉—そう決まったときは、簡単にできるだろう…という気持が内心あった。時間的、人数的なことよりも、歌って、何か自分達が楽しくできればそれでいいじゃないか…ぐらいのレベルでしか考えていなかったのだ。／だが、実際やってみると、思った以上に難しい—もしかして、間に合わないかも…そんな不安さえよぎった。私は、簡単なピアノ伴奏も同時に請け負い、セリフを覚えること、体を動かすこと、それぞれが中途半端になることがほとんどだった。さらに、「まだ時間あるよね…」という、気持が練習の途中、出てきて、毎回進歩のない練習をしてしまった… (略) …^{*18)}

ここにいうように、オペレッタのグループは、照れ隠しもあって、お互いに簡単にできるという

ような感じで話し合っていたが、しかし、5月中旬になってさっそくお互いに声に出しながら読み合うようになってみると、今度は、とたんに練習がうまくいけなくなり、歌の部分の練習だけで、6月の中旬くらいまでかかった。このころから、学生たちのエンジンがかかりだした。学生たちは、後に書いたレポートの中で次のように述懐する。

〈… (略) …最初にオペレッタの楽譜を見たときは、どうなるんだろうと思ったが、みんなで話が少しずつ進んでいってなんとかなるかなと思った。また火曜日の空き時間にも練習をしようということになって、みんなのやる気が伝わってきた。そしてまずは歌の練習から入り、ピアノを練習して弾いてくれた人のおかげもあってうまくなっていった。しかし、ここから先が苦勞した。「はだかの王様」にはいろんな場面があって、いろんな役もあった。これを全員で表現するにはどうすれば良いのかというのが難しかった。しかも道具などは使わず、役も固定せずということでもかなり戸惑う部分が多かった。それでもなんとか合わせていってやっと一通りできるようになった… (略) …*¹⁹)

〈… (略) …オペレッタは、練習が予想以上に大変だった。幼稚園や小学校の時は、練習で困ったことがあると先生が助けてくれたが、今回はそういう人はいなかったの、思うようにはかどらないときがあった。しかし、やはり大学生にもなると、みんなの気分がのってきたらすごかった。どんどんいいアイデアが出てきて、「ここはこうがいいんじゃない?」「それでもいいけど、こうしたらもっといいんじゃない?」というように『はだかの王様』を完成させようとみんな頑張った… (略) …*²⁰)

自分たちの頭を使って、自分たちの表現を自分たちでつくりあげるといふことの苦勞と同時に、やりとげたときの充実感というものが非常に大きかったことがわかる。複数のグループをつくり、それぞれ学生たちに任せきりということは、担当者としてもどかしいものだが、しかし、学生からすれば一切の逃げやいいわけの余地がなくなり、すべて自分たちの責任で最後までやり遂げるとい

うことだから、相当な努力が必要となる。別の学生はつぎのように書いている。おなじく、事後のレポートの一部である。

〈…総合演習の講義は他のものと違って、先生がヒントをくれるだけで答えはなかった。答えは十人十色で、詩を作ったとき (実際には詩作の時間はなかったのでおそらく詩のイメージをプリントに書き込み、発表したときのことである一筆者) には自分もあてられるのかとどきどき、わくわくした。小学生や中学生だったら、私以上にどきどきわくわくしたことだろう…*²¹)

筆者は、学生たちの表現の上でよいところを指摘するだけとし、学生たちにもそのことを奨励した。あら探し、まちがい探しをするのではなく、仲間のよいところを発見し、それを全体に拡大していくようにうながした。“正答”のないなかで、自分のイメージしたものを出してみることによって、お互いにその中からよいものを発見し、全体に拡大していく。教師としては学生たちが気づかないよさを指摘し、それを拡大することにつとめるわけだが、しかし、それはなかなか難しいことである。つつい欠点ばかりが目についてしまって、本質的なよさが見えてこない。別の学生はつぎのように述懐している。

〈… (略) …オペレッタをすることに決まったときや、練習を始めたばかりの頃は、恥ずかしいという気持ちばかりが大きく、これからどうなるだろうと不安だった。けれど発表を終えた今、これまでの練習を思い出すと、やって良かったという気持ちでいっぱいです。／私が最後に劇をやったのは、小学校2年生だったと思います。そのころの劇を思い出すと、先生が一生懸命教え、子どもたちは一生懸命に覚えるという感じで、楽しさよりもみんなに見せるために練習していたような気がします。けれど、大学2年生でやった久々の劇 (オペレッタ) は、誰かに言われたとおりに動くのではなく、自分たちで考え、作り、練習し、仕上げるというもので、すべてが自分たちにかかっている劇でした。みんな初めての経験で、手さぐり状態だったので、大変だったけれど、その分とても思い出深いものとなりました。みんな話合いをしていると、自分では思いつきもしなかつ

た意見がたくさん出てきました。ここはこうした方がいいのでは…といういろいろな人の意見を合わせて、よりよい劇にしようとみんな熱心に取り組んでいました…(略)…^{*22)}

自分が児童や生徒に表現活動を指導するとしてらどうするかというような視点で取り組み、そういう意味では大部分が成功したといってよい。教師がある一定の型にはめれば、そのなかで子どもは萎縮し、その枠からはみ出るものは異端視される。子どもがいきいきと表現する事実をつくりあげた実践例では、それより自分の頭でよく考え、表現する内容を頭の中に具体像として思い描きながら、それを身体全体で表現することにより、思いもかけないよさが生まれてくるということを大事にする。そのよさを子ども全体に拡大していき、見習うとか、学ぶとかいうようなことがその場に生じる。その際、気恥ずかしいとか、照れてしまうという実態であれば、それを出発点として、その子たちがどのように自分を知り、自分をかえていくことができるかということを考え、表現の内容や方法を工夫することになる^{*23)}。レポートの中で、「誰かに言われたとおりに動くのではなく、自分たちで考え、作り、練習し、仕上げる」ということの大変さを指摘すると同時に、やりとげたときの充実感を受講生が共通に感じ、それを指摘しているということは、特筆してよい。

4) 表現活動を終えて

7月中旬、最終成果を発表することになった。練習の時から広い場所を求めていたがあいにくどこもふさがっており、結局、5月から使用してきた大講義室で行なうこととなった。机や椅子が固定式であり、表現する場所は狭いが、そのなかで工夫してやってみるということはあってよい。当日のことについて、学生たちは事後のレポートで振り返ってつぎのように述べている。

(…(略)…そして、本番、初めて、詩のグループの人達の作品も鑑賞した。音も動作もない詩を表現するのは、ひどく難しかったと思うのだが、詩のグループの人達はきちんと表現できていて“すごい”と思った。私が特に気に入ったのは、

河童と蛙の詩の中の“もうその唄も聞こえない～月だけひとり動かない”の部分だ。それまでの段落では、明るく元気な感じだったが、ここの段になると急にしんみりした感じになって、詩のグループの人たちは、それを上手く表現できていたので、心がきゅーっとなって切なくなってしまった。／私たちの発表である裸の王様は、もちろん完璧にはほど遠かったが、一人一人が楽しんでできたからそれでもう“満点だな”と思った。みんないつもより声が大きく出ていたし、場面の移り変わりもスムーズにできた。私も思いっきり歌ってみた。ちょっと上ずってしまったけど、“この歌を歌うのは最後なんだ”と思って大切に大切に歌った…(略)…^{*24)}

この学生は、詩の朗読のなかでよいところを具体的に指摘する。詩のグループでは、月明かりに照らし出された静かな湖上で繰り広げられた、河童の祭典の前後をどのように解釈するかということに課題があった。このように集中してよいものを発見しようと意識してみることによって、粗探的ではなく、本質的によいところを発見するレポートができてきているようである。別の学生はつぎのように述懐する。

(…(略)…発表会当日。100%完成した状態で本番にのぞむことはできなかった。それなのに、みんな練習のときよりはるかにいい演技をしていた。みんなみんなの様子を見て、私も頑張らなきゃと思った。観客は同じ学科の顔見知りのメンバーなのに、なんだかとても緊張した。本番はあっという間に終わった。／『うさぎ』と『おおきな歌』の合唱は、気持よく唄えた。こんなに大きな声を出して一生懸命に唄ったのはすごく久しぶりだった。本番は『うさぎ』の合唱が練習のときよりもきれいにはもれなかったのが残念だった。／詩の朗読は、一観客として見せてもらった。普通の詩なのに、気持を込めて読むと雰囲気は全く違った。見ていて、聴いていて、詩の世界にすーっと入りこんでしまった…(略)…^{*25)}

直前に行なわれた自主練習のときには、まったくどうなるのかと心配したが、当日はすでに休み時間から練習がくりかえされており、始業のベルが鳴ったあとも練習が続いた。そして最終的に

お互いに成果を見あうことになった。いざとなると教室には非常に張りつめた空気が漂い、固さがあり、失敗したらやり直せばよいというようなことを話して、それぞれの発表となった。しかし、それはまったくの杞憂であった。つぎの学生は、同様の指摘をしている。

〈… (略) …そして本番をむかえたわけだが、今までとは少し雰囲気違った。みんなの成功させようという気持が伝わってきた。声もよく出ていたし、動作も練習では見せなかったような動作もあって、(特に始まりの部分で町の人いろいろな人を演じる場所) 良かったと思う (にぎやかな町に機織りのいかさま師たちがやってくるというシーンであり、この場面でにぎやかな町の様子を身体全体で表現するように話していたのであるが、練習のときにはなかなかよい表現がでてこなかった一筆者^{*26})。そのおかげでみんな楽しそうにできていたし、見ていた人たちにも楽しそうに良かったという感想をもらうことができた。／最後に本番を終えて思ったことは、本番を終えたあとに、こうすればよかったなという点のはっきり見えた気がする。本番では完璧にしようとするので、そこで見えてくるのだなあとと思った。練習は本番までに間に合うようにとすだけなので本番になってその部分がはっきりしてくるのだろうと思う。これだけ時間があつたから本番までに仕上げることができたのだが、仮本番が前にあればもっと良いものができたのかもしれない。そのあたりは時間や気持の面を考えても難しいなと思った… (略) …^{*27})

ここで、この学生がさらに追求したいと述べている点に注目したい。やればやるほど課題が見えてくるということであり、7月以前にひとつの山場として発表の機会があればさらによいものになっていたのではないかという指摘であり、これは担当者のゼミづくりの課題としておきたいところである。勿論これは結果からのことであり、実際には最終的な成果発表の前に山をもって来た場合には、さらにつぎの山場を用意するには、相当な努力が必要となる。それ以降続けたからといって必ずしもさらに高いものがつくれるという保証はないが、しかし、この学生がさらに追求したい

という点が貴重である。つぎの学生は、場面のつながりがうまくいかないということを発表の前の週から話しており、そのことを課題として最終成果の発表の時間にのぞんだ。

〈… (略) …発表の前になるとどんどん焦ってきました。場面と場面のつながりがうまくいかずに直前まで「どうする? どうする?」と言っていた気がしました。発表のときはちゃんと最後まで止まらずにできるか不安だったけど、なんとか最後まで出来て、本当にうれしかったです。しかも、詩の人たちに「楽しそうだった」とか、「歌が上手だった」とか言ってもらって、少しびっくりしました… (略) …^{*28})

ひと続きの物語として複数の場面を構成するのは、大変難しいことである。かつて表現指導の実際をみる機会を得た際に最後の手入れとしてもっとも心を砕いたのが、作品全体の流れであった^{*29}。作品全体が大きな波のようにつながりを持ち、薄衣が重ね合わさるように作品世界が織りなされていくというような雰囲気をつくる。そのためには、表現する子ども同志が互いに調和すること、風に吹かれる風にならなければ、風に吹かれて張りつめた風のように、一方の風が風になびけばその反対側で風を操る人は、風に体が引き寄せられるというように表現者の全員がお互いに緊密な連絡を保つことが必要である。先行の実践例において、同様の指摘がなされており、表現を質的に高めていくために必要な点をこの学生が指摘しているということである^{*30}。つぎの学生は、詩のグループに属し、自分たちの表現がなかなかうまくいかないことにいらだっていたことが何度かあった。学生自身は、心をひらいて大変熱心に練習に取り組んだ。自分自身を見つめ直し、自分に対して非常にきびしい見方をし、妥協を許さない姿勢があり、述懐にもそれが現われている。

〈オペレッタの出来は非常によかったと思う。所々照れ笑いが見られたが、明るい表情という観点からすればマイナスにはならなかった。良かった点をあげると、道具を一切使わないで表現力を重視していたこと、歌がすばらしかったこと (歌うことが好きだという思いが伝わってきた)、本当はまだまだであったろうが、出番待ちで緊張し

ていたため、客観的に見るができなかった。オペレッタは勿論、群読のグループもゼロから積み上げてきて発表に到ったわけで、両方とも最高の発表を供給するために努力をしてきた。だから成功してほしかった。改善点も書いていたのだが、書いているうちに馬鹿らしくなってきた。授業以外の日にも練習をしていたのだから、これ以上は高望みに他ならない。演劇部ではないのだから、人を魅了させる必要はない。「自分達は今日までこれだけのことをしました。そして今日は一生懸命演じます」それだけ伝われば成功なのである。結果は勿論…^{*31)}

特に特定の人間を選抜して、訓練したのではないという意味合いのことをこの学生が指摘していることが興味深い点である。学校教育においては、特定の特技をもつものだけが活躍する場を与えられるというものではない。むしろその反対に、全員がその活動に参加し、それぞれの持ち味が波紋のように集団の内部にひろがるように組織され、お互いがそれぞれのよさを習いながら勉強するというところに集団の特性を生かした学校教育におけるひとつの特長がある。つぎの学生は、詩のグループにおいて世話役的な存在であり、表現の意味について、ゼミを振り返って具体的に考察している。

〈この講義を通して「表現する」ということは、たくさんの機能をもっているんだということを強く感じた。それらについて2つほど述べたい。／第一に、「人と人とを結びつける、心と心をつなぐ」ということである…(略)…本番を終えたとき、心から楽しかったと思うことができた。そして、詩を朗読すること、表現することで6人がまとまり、6つの心が本当にひとつになったと感じた。相手のことをより理解することができたと自負したいし、自分のことを前よりは他人に知ってもらえることができたのではないかと思った。表現という活動を精一杯行なうことで、人と人はつながっていくのだということを身をもって感じた。／第二に、「自己を再発見する、アイデンティティーを再構築する」ということである。たとえば、詩の解釈についての意見は6人それぞれ違うものであったし、詩・朗読の発表を終えたあとの

感想も20人それぞれ全く違った。各個人が、しっかりと自分の思ったこと、感じたことを言葉にしていた。私は、このことにとっても感銘を受けた。表現するという活動、または表現を鑑賞するという活動は、自分自身としっかり向きあい、見つめ直していくきっかけとなるのだ。そして、このことが自己の再発見、アイデンティティの再構築につながっていくのではないかと思った。実際、私自身も自分なりに意見を出したり、表現してみたりすることで、自分自身を知り、見つめ直すことが出来たような気がする。／最後になるが、表現するということは、思った以上に奥が深く難しいものであった。しかし、それらを上回るほどの楽しさ、喜びがそこには存在した。充実感も得られた。これから生きていく上で、表現することの楽しさ、喜びをもっともっと感じたい。更には、これらを他人に伝えてみたい、そう強く思った。^{*32)}

このように自己の体験を対象化するということは、日常的には難しいものであるが、ここでは精細にゼミを総括し、かつ表現活動のもつ意味を深く追究する。ここでいうように“自分とは何か”、“私はどこからきてどこへ行くのか”という問いを持ちつづけて、充実した青年期を過ごし、自己実現に向けて、一人でも多くの学生にその気になってもらいたい。

つぎの学生は、詩の朗読グループに参加し、仲間の課題を指摘しつつ、それを自らの課題として引き取っている。一般的には、謙虚に勉強するというと、卑屈になったり、いじけてしまったりすることと同義にとる学生が多いが、この学生は、かつての自分と二重写しにししながら、仲間の課題を自分たちの課題として引き戻して考えることで、自分自身を再発見している。

〈…(略)…練習をする度によくなっていったが、やはり本番が一番良かったと思う。自分たちの発表の前にオペレッタを見ていて良かったと思う。オペレッタの人たちは本当に楽しそうに笑顔で演じていて、恥ずかしそうに下向き加減の人はほとんどいなかったが、若干名のそういう人たちが非常に目立って見えて逆に恥ずかしく感じた。そして、自分たちの姿と重なった。発表の際、手が少しふるえていて、緊張していたが、めいっば

い明るく読んだり、抑揚をつけたりした。二つの詩を読む間の時間はすごく短く感じた。みんなで読むところはそろっていたし、終わってから自分たちで「良かったんじゃない」と言ってしまったので、良い作品ができたと思う。／歌をうたっている間も、やり終えたという達成感のようなものがあつたのでいつもより楽しく歌えた。思春期ぐらいの頃は恥ずかしさや照れがあつて、できなかったことが今となってできたことを不思議に思う。／「人に見せる物」というのを意識してつくろうとしていたが、人を楽しませるためには自分が楽しむのが大事なんだということがわかつた。今後に生かせる大事なことに気づけたし、学科内のコミュニケーションも深まつたので、とても良かったと思う。^{*33)}

心をひらき、のびのびと表現したことが、自分自身にとっても不思議であるとの学生は感じた。表現することは、自己の再発見であり、創造であり、人間を解放するというように一般的にはいわれる。それが実感として理解できたということであり、新しい自分を発見するという大変貴重な体験をこの学生がしたということである。つぎの学生は、オペレッタのグループに所属し、これまでの練習を振り返り、自己に対して批判的に感想を述べている。

〈…(略)…練習をしていく中で、一度も最初から最後まで通せたことがなかつた。私はこの時、絶対に本番に間に合うわけがない、上手いかないだらう…と考えていた。自分も含めて、みんな集中力があまりなかつたように思える。だからこそ本番での出来は驚くほどによかつたとは私は満足している。練習では、何をやるにしても一切照れの抜けなかつた私たちだが、本番では堂々としていた。私は本番最中ずっと「みんなすげー。」とっていた。／今では練習も含めこの講義の内容に大変満足しています。^{*34)}

学生にとってみれば、必修科目であり、その時間の中でかなり強制的に表現活動に取り組みされたということであり、開講当初は、実現は難しいかも知れないと筆者自身が考えていたが、しかし、実際にやってみると、うれしい誤算であるが、当初の予想をまったく裏切る結果となつた。

筆者が見る限りにおいて、学生たちはよくやっていたのであり、次第に表現することの喜びを感じ、さらに、追求することの喜びを実感として感じた。心をひらいて表現活動に取り組むには、勇気がいるし、乗り越える壁がいくつもあるが、しかし、ちょっとした努力をもってその活動に挑戦してみることでおおきな成就感が得られる。

つぎの学生はオペレッタのグループ内で世話役的に心を砕いていた。前日に本番さながらのゲネプロをやっておけばよかつたと述懐している。このことは、もつともであり、ゼミ運営上の課題としておきたい。

〈…(略)…今、思えば、一回くらい本番と同じ緊張感をもって、ゲネプロできればよかつたな…と反省もしている。手具を使わずに、体だけで表現することは、思った以上に難しい—小さい頃より、なんだか素直にできない気がする…照れと恥ずかしさが混ざり合つて、笑いや中途半端な演技も出てくるし、「オペレッタ」って、実はこんなに難しいんだな…と改めて、実感—。／さて、本番の日を迎えて—／驚いたのは、皆あの集中力!! 本番、やる時はやるぞ! という気持が一気に凝縮されたような空気が流れた。ピアノも3人共上々の出来。歌のハーモニー、動き、声の大きさ、どれをとつても、今までで一番のできだつた。1人、かけて、参加出来なかつたのは残念だつたけれど、その分、本番参加した皆全員で、その分を十分すぎるくらい補えたと思う。自分たちで作上げる「何か」って、いつぶりだらう…? 大学ですることって、めつたにないよなあ…と、クラスの団結力も深まつて、有意義な時間を過ごせたらう。／朗読の方も、本番はビシッと決まつて、思わず聞き入ってしまった。オペレッタと違って、「動」の部分はないけれど、「静」の張りつめた感じが、とてもよかつた。感情移入も、皆の性格と役の性格が、うまく重なつているところもあつて、すばらしい群読になつたと思う。／歌も、クラスのハーモニーって、こんなにきれいなんだなあ、実感できた。練習次第では、どんどんよくなるだらうし、ちょっとした発表にも対応できるのでは…? と思うのは、私だけかな。先生も思いますよね?! /最後に—。総合演習は、今期

一番クラスのまとまりを深めた講義だった。大学ではほとんどこういう機会はないので、とても楽しく、積極的に取り組めた。1年に1回はこうして、取り組む場があっていいのではないかなあと、感じているところです。^{*35)}

最終回の発表会当日に参加出来なかった学生は、最後の発表に参加出来なかったことをとてもくやしかったと最終レポートに書いた。上記の文章では、全員で取り組むことができず残念だったという。実際に、学生たちの雰囲気はそうであった。時間割上の開講時間帯以外に、6月からは火曜日の午後に自主的な練習を始めるなど、表現活動に取り組むことが学生たちに大変よい影響をあたえたといつてよい。

つぎの学生は、詩のグループに入っていたが、しかし、なかなか心をひらいて参加することができなかった。恥ずかしいという思いが先に立ってしまい、ゼミの最中には照れ隠しをすることが多かった。そのことを正直に述懐しており、自省的に自己を見つめ直している。このように、できれば伏せておきたいような自己の問題を最終レポートに書けるということが大変すばらしいことであり、こうした学生を一人でも多く育てていきたい。

〈… (略) …本番は、自分でも思っていなかったが緊張してしまった。それでもいつも以上に声を出すことと、上を向くことに気をつけながら読んでいった。／反省する点はいくつもある。話し合いの場面では、あまり意見が言えなかったこと。本番までに詩を覚えきれなかったこと。表情がたかくなってしまったこと。もっと声が出たのではないか。もっと声で表現できたのではないか、など振り返ればキリがない。けれど、みんなで1つのことに協力することは、楽しい。それは、大学生でも同じである。ただ、なかなか表現する機会が少ないので、照れてはしまうのだが。大学でも、表現すること、自主的に表現内容を考えること、1つのことにみんなで協力することは、必要である。^{*36)}

3. いきいきとした学生を育てるために

今回の取り組みは、教師教育における内容や方法の開発ということを念頭に置きながらすすめ

た。現在、大学で行なわれている教師教育には、先行研究が指摘しているように、教育学、教科教育、教科専門の三者がそれぞれバラバラであり、その三者を統合する軸がないという問題がある。その軸をどうつくっていくかということが今後の課題であり、筆者は、それを授業や学校行事などの学校教育現場の追究課題に即したかたちで創造する必要があると考えている^{*37)}。その意味で、表現活動は、ひとつの軸として考えてよいと思っている。表現活動においては、朗読や歌唱、舞踊などに代表されるように、すでにある作品を教材として使用し、その教材を解釈することによって、教材の世界を身体全体を使って、時空的に表現するという側面と同時に、描画や彫塑、ものづくり、文章表現のように対象の認識活動を複雑にともないながら道具を活用して表現する側面があり、その何れもが学校における教育課程において、教科目の枠組みを超えた、総合的な内容をうちに含む。したがって、こうした活動を教師教育の内容として組み込むこと自体が、既成の学問や芸術の統合を志向する。そして、一歩進んで表現内容において地域や社会全体の課題を取り上げ、そのことの追究をすすめることが可能である。とはいうものの、こうした原則論はともかくとして、表現することは楽しい。将来教師をめざす学生たちには、それぞれの持ち味を生かすかたちで何らかの表現活動に関わり、人間としての充実した生き方を追求してもらいたい。そして、それを栄養剤にしながら、教師として毎日の授業や学校行事を創造的に作りあげてほしい^{*38)}。

(註)

- * 1 「身体表現活動」(箱石泰和執筆)、横須賀薫編『授業研究用語辞典』1990年、教育出版、167-168頁。
- * 2 都留文科大学や立教大学で教師教育に携わっている川嶋環さん(元群馬県島小教師)から、授業や学校行事の実際の指導について教えていただいた。そのことを頭に置きながら、総合ゼミの内容や方法を構想した。
- * 3 川嶋環さんによる詩の授業である。授業の詳細は、川嶋環「子どもの心をどうひらくかー思春期にさしかかった子どもにとっての表現」、横須賀薫／梶山正人／松平信久編『心をひらく表現活動3 表現の追求』1998年、教育出版、8ページを参照。また、横須賀薫「教師こそが生き生きと」、横須賀薫／梶山正人／松平信久編『心をひらく表現活動2 みんなでつくる』1998年、教育出版、27-29頁に詳しい。
- * 4 2003年7月、学生レポートより。
- * 5 同前
- * 6 同前
- * 7 次の文献を参考にした。たとえば、竹内敏晴『「身体」と「言葉」のレッスン』1990年、講談社、76-116頁。波瀬満子・谷川俊太郎『アラム、あいうえお! ことばをあるく9000日』1996年、太郎次郎社、48-49頁他。野口三千三『野口体操からだに貞く』2002年、春秋社、59-65頁他。
- * 8 川嶋環さんの授業、2002年7月1日、沖縄県普天間小学校4年1組で実施、ほか。
- * 9 2002年1月17日沖縄県識名小学校5年3組での授業、ほか。
- * 10 2002年11月8日、沖縄県浦添小学校6年1組で行なわれた川嶋環さんの詩の授業を参考にした。また、2002年11月7日、沖縄県浦添幼稚園において、元群馬県境小教師の大槻志津江さんからは、発声法や表現指導の実際についてご教示いただいた。
- * 11 川嶋環「子どもの心をどうひらくかー思春期にさしかかった子どもにとっての表現」前出、11-13頁
- * 12 松平信久「教師の表現力を高めるために一教師をめざす人の表現活動からー」、横須賀薫／梶山正人／松平信久編『心をひらく表現活動3 表現の追求』1998年、教育出版、85-103頁。
- * 13 2003年7月、学生レポートより。
- * 14 同前
- * 15 同前
- * 16 同前
- * 17 梶山正人作曲、千葉教授学研究会作詞、構成。『梶山正人オペレッタ曲集 子どものためのオペレッタII』1989年、一莖書房、2-26頁所収。実践記録は、小出哲也「『はだかの王様』を発表して」、『事実と創造』67、1986年12月、一莖書房、25-32頁。山崎佳乃「オペレッタ、『はだかの王さま』をつくる」、『事実と創造』77、1987年10月、一莖書房、42-57頁など。
- * 18 2003年7月、学生レポートより。
- * 19 同前
- * 20 同前
- * 21 同前
- * 22 同前
- * 23 2002年6月から11月にかけて大槻志津江さんによる「子どもの四季」(斎藤喜博作詞、近藤幹雄作曲)、川嶋環さんによるリズム表現などの実際の指導の場所に立ち会う機会を得た。
- * 24 2003年7月、学生レポートより。
- * 25 同前
- * 26 小出哲也「『はだかの王様』を発表して」、前出、山崎佳乃「オペレッタ、『はだかの王さま』をつくる」、前出を参照。
- * 27 2003年7月、学生レポートより。
- * 28 同前
- * 29 千葉経済短期大学教授の梶山正人さんによる実際の指導をみる機会を得た。このことについては、狩野浩二「伊江村立西小学校の教育実践」、『鹿児島大学教育学部研究紀要』第52巻、2001(平成13)年、193-210頁に報告したことがある。
- * 30 戸田淳子「『子どもは世界だ』の実践」、教授学研究会編『表現をひらく教育実践』第Ⅱ期教授学研究3、1983年、国土社、210頁など。
- * 31 2003年7月、学生レポートより。
- * 32 同前
- * 33 同前
- * 34 同前

狩野：学生の表現活動

*35 同前

*36 同前

*37 横須賀薫『『大学における教員養成』を考える』、藤田英典、黒崎勲、片桐芳雄、佐藤学編『〈教育学年報9〉大学改革』2002年、世織書房、219-223頁。

*38 狩野浩二「島小における教職員の力量形成」、『鹿児島大学教育実践研究紀要』第10巻、2000年、47-62頁。斎藤喜博が校長として学校づくりに関わった島小では、児童の表現活動と同時に、教師自身の表現活動が奨励され、それが教師たちのエネルギー源になっていた。

【附記】

授業や学校行事の創造ということについて文献的な研究をすすめると同時に、数年前から学校現場において実際の授業に参加し、勉強する機会を得ることができた。そのことが今回のゼミナールづくりにおおきな力となった。沖縄県教育庁那覇教育事務所の西江重勝所長には、教育実践との接点をつくる上で力をおかりした。また、沖縄県識名小学校・識名幼稚園、同西小学校・西幼稚園、同普天間小学校・普天間幼稚園、同城東小学校・城東幼稚園、同久米島小学校・久米島幼稚園の教職員、保護者、子どもたち、さらには沖縄県那覇市教委、浦添市教委、伊江村教委のみなさんにも物心共にお力添えをいただいた。また、教授学研究会の川嶋環さん、大槻志津江さんには、実際の授業の中で子どもを“みる”ということについて、具体的にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。